

トロントのクレセント・コテージ

C. J. L. ベーツ第4代院長（院長在任：1920-40）がカナダに帰国後、トロントに求めた家を「クレセント・コテージ」（「クレセント」は関西学院の校章）と呼んでいたことを広報誌で紹介しました（『クレセントの予兆』、『K.G. TODAY』No. 294、2017年2月、23頁）*。お読みになった方から、その家のことをもっと教えて欲しいとの声が寄せられました。

古い書簡に記された住所をもとに、私がその地を訪ねたのは2012年夏でした。敷地と建物の佇まいから、その直前までどなたか住んでおられた気配を感じましたが、既に空家のような様子でした。そこで、同窓会報『母校通信』を手掛かりに、この家のこと、当時のベーツ夫妻の様子を探ってみましょう。

*広報誌に掲載された最初の35話を1冊にまとめ、大学博物館展示室で配布しています。
(学院史編纂室 池田裕子)



まず、写真ですが、『母校通信』第12号(1954年5月、6頁)に、ベーツの英文メッセージと家の前で撮影されたと思われる写真【左】が掲載されています。しかし、人物がクローズアップされていて、家の外観はよくわかりません。メッセージの内容は次の通りです。

1954年の年頭にあたり、関西学院の全卒業生にご挨拶申し上げます。妻と私が日本を去って13年になりますが、霊的には今も皆さんと共にあります。背後に山を抱く図書館(時計台)を描いたキャンパスの絵が私のベッドの上に掛かっています。毎朝目覚める度、愛する母校への思いを新たにしています。日本の素晴らしい戦後復興と新生日本の文化、産業、経済に寄与する関学卒業生のリーダーシップを嬉しく思います。皆さんの上に神の祝福がありますように。



ベーツが残した写真アルバム(モントリオール在住のご令孫アルマン・デメストラルさん所蔵)を調べたところ、トリミング前の写真【左】が見つかりました。これでしたら、家の外観がわかります。さらに、「CRESCENT COTTAGE」と記された写真【下】も目に留まりました。軒下の数字「42」は、この家の番地を示すものでしょう。

敗戦から10年、日本からはるばるこの家を訪ねた教え子がいました(1955年4月と6月)。恩師は喜寿を超えていました。それぞれの訪問記が『母校通信』に掲載されています。そこに描かれた、日本を思う恩師の姿と家の中の様子は、この家が「クレセント・コテージ」の名にふさわしいことを教えてくれます。



三月一日から二ヶ月のあわただしいアメリカの旅で、久しい念願であったドクターベーツ訪問の挙を果したことは、なんとしても大きな喜びであった。

トロントの先生の住居はタクシーで三十分もかかる辺鄙な所で而も運転手が探すのに随分骨を折ってくれたが先生の顔を見た瞬間私は兔に角来てよかったとしみじみ思ったものだ。

思えばお別れしてから早や十数年が経っているのだ[。]頑丈な体格、紐で釣った眼鏡当時と変わらぬ白髪、なつかしい太い声はその儘だったが流石に寄る年波と云うのか気力は衰え耳も遠い様だった。家に足を踏み入ると掛字も





額の絵もペナントも花瓶も置物もすべて日本製で無いものはなく重い卒業アルバムを沢山抱えて来て一枚一枚ページを繰り乍ら当時を思い起される先生のいきいきしたまなざし。先生の思い出のすべては多分日本の事だったのだろう。

私が戦後の日本のことを話すと『ウエル、ウエル、ウエル』とつぶやきつゝ自分の頭に浮かぶ昔の日本とのピントを合わせられるのだろう。静かに日本のことを思うとなつかしく、何とかしてもう一度日本に行き度い。事実

この人の病気が無かつたら再度行けたら。としみじみ云われた時には思いなしか先生の目頭にはあつい涙が浮かんでいた様に思えた。人生の多くの部分を日本に住み何万と云う日本青年の教育に尽し夫等の教え子の運命を戦争と云う冷たい現実さらしつゝ心ならずも日本を去らねばならなかつた先生が戦後の悲惨な日本の状況を聞き心を痛めつゝ一度日本に行き度くも奥さんの病気の為め果せず遙かに日本を偲んで居られることを思うとこゝ迄来ると人の心にはもう国境は無いとしみじみ思わぬ訳にはいかなかつた。

最後に隣室に病臥中の奥さんに御目にかゝつたが嘗ての姿は既になく痩せ細りものも云えず動きも出来ず況して目の前の訪問者を誰と識別も出来なかつたに相違い。聞けば何回か危険な状態に陥られたそうだが神の恵みで救われたと云うことであつた。私もこの上共ゆたかなる神の恵みが病む奥さんの上に降りそぐことを祈るのみであつた。

先生にバスの停留所迄送つて頂き心を残しつゝ去つたのは四月七日の午後四時頃の事でこの写真はその時撮つたものである。別れる時先生はオールドクワンセイの繁栄と卒業生の健康と発展を祈られると共に出来るだけ多くの同窓生が便りをくれる様にと希望されたことを忘れずに諸兄に御伝えたい。(昭七文専卒田村商会支配人) 滝公平「ドクターベイツを訪ねる記」、『母校通信』第15号、1955年10月、8頁。

ベイツ先生 Rev. C. J. L. Bate のお住居はトロント市の西部住宅地(42 Royal York Road South, Toronto 18, Canada)にあり、中心地から電車とバスを乗り換へて約四、五十分かかる閑静な地域の小ぢんまりしたお宅は学院退職のとき集まつた拠金によつて購入されたもので当時は全く人家もまばらな郊外住宅地だつたそうです。もともとベイツ先生訪問はカナダ旅行の主要目的の一つで、四月頃から先生の御従弟でトロント大学英文学助教授ドナルド・ベイツ氏やトロント在住のカナダ劇壇の一人ロオン・グリーン氏などに紹介していただいたので、六月十九日トロント市に着くとすぐ電話をかけ、翌二十日午前中にベイツ先生をお訪ねした。十七年ぶりにお眼にかかるのだが、先生は白髪にこそなられたが、なかなかお元気で昔ながらの鼻眼鏡とステッキを愛用されている。一週一回トロント教会信者の矢田部つねさんが家事手伝いに来られるほかは、身体の御不自由なベイツ夫人とたつた二人ぐらしで何かと奥様の身辺を気づかつて、やさしくいたわつていらつしやる。私の訪問を非常によろこんでいただき、丁度矢田部さんが居られたので、留守をたのんで私を誘つて近所の中華料理を御馳走して下さつた。その途中も知人に会うとわたしのことを「かつて卒業式のとき総代として自分の手から卒業証書をもらつた教え子」だといかにうれしそうに紹介されるので、こちらが恐縮するくらいだつた。院長当時の話や学院の近況、さては戦争中のカナダの対日感情のことなど話はつきなかつたが、その日は再会を約しておいとまし、こえて六月二十六日再び先生をお訪ねした。先生の御手料理で、奥様も御一緒に夕食を共にしたのは忘れ得ぬ印象である。

…アメリカとちがつて人事交流計画のないカナダへは、日本の留学生はあまり行かず、しかもわれわれフルブライト関係者の旅券ではアメリカ再入国が困難なために、カナダを訪問する機会が甚だしい。私も幸い国務省の特別許可を得てカナダ入国が出来たので、ここにその報告の一端をお知らせするわけである。(法文昭一三 名古屋南山大学教授)

中川龍一「ベイツ先生と故ウツツウオス博士未亡人を訪ねて」、『母校通信』第16号、1956年5月、23-24頁。

ベイツが通っていた、自宅近くのロイヤルヨークロード教会

